3011
5

いろは文庫い編序

早稲田文庫

人は食せざるときの愛文を味はし
難き所のものいろいろ穿鑿故人の寄言
所以仮名文庫三史に倚て実事
せじ素より果敢なき策なれども
思ひふ漢粉はんとて食言と吐し

へ3
3011
5

昭和九年
七月十二日
購求

そもそも笠の端も見つゝ秋の日の人畫ふ
後つゝ後つゝ恭成重なれば昼の蛍たゝ
夜ゝ輝くゝ燈ふ。花延仕事の手能
御年太閤の御ふ紀ふ僅の燥のゝ急
げどまゝぬ日の柳の影の長橋ちがく
志くゝも帰幼狩章ふ勧懲の標の

為の捷徑も微まほとかまでふ手
を屠げる編巻実ふ手の踊ゝ冥角
遠ひ作業簾恭と見ゝ志ばば御見
作へ人ゝ

四十七士の名

滝水春水記

阿民ハ里見性の處女　節婦　於民

あり幼くして父ハ亡くれ
光提強八ハ苦まさる
介ぞも父の遺訓を
變せも湖平太正知ハ
身をよせて一子を得ら正知
義ハよろて死せとき良夫の
義名世ゝ埋れん支を歎き由を
公ゝ訴へくおもふ道ハと迫り浅
官吏より止められ髻を薙て節を
全ふ其子兼松森氏を起して
某候ゝ奉仕せ
支ハ本文ハ委し

湖平太ハ一子兼松

光風ハ支ハ
第五編
伊津
女ヶ筆
踊る
あり
つたり
因て遣る畧さ

矢間
新六光風

光提強八

片岡ゲ誠忠
神ふ
通ド
青山
稲荷
の冥
助こうして
眼病忽地ふ
平愈うそ庸医
蝶菴貪慾の
財布失ふふど神策
尤もうぞうこん
片岡ゲ下僕
元助
片岡ゲ
下僕
元助

不具野
蝶菴
中村
軍兵衛

師直ゲ壁妾
苅稻の方
実ら
唯七ゲ
妻
遠代
操我
破りて
操こう苦心して
義名ばかり賞ま
べー這三ケ男女
侍女
初瀬
実ら
包秀
許嫁
遅手

岡野
新右エ門
包秀

玉出
七郎右ヱ門
自愛

人面獣心更み
論ふ土夜
損て賊を
食り
子戒
慢れて
晴夜よ
走る
賊室身よ
全うして
汚名万代
世に滅
九太夫
世音嫌
斧
九太夫
利一

正史
実傳いろは文庫巻之十六

江戸　爲永春水著

第三十一回

再説師直八畳の間に出会ひ居る間章身を
振り構へ逼まんとまろぶ所清流一侍女二人が左右より
抱付て極側の組変つて西南の方に差添ひ差出の
侍八氷の如き刀を抜て師直の胴に突込押へ一女の
中を除るいとまもなくひらざまに其終に師直の首を

掛りを刎除んと為ける故二人の女ハ一生懸命のちから
手先に入るから　女「兎ても逃まいね汚名が帰にお首を
延てれ宝殿を見ます　女「サア此侭にお首を早く私の
首まで近辺で是通しうが能ひハ無ひナア　師直「主殺しの女
ども。出合〳〵ト以て声を立させで早く手に大変忍びの者
是非におよばず女の手先ゆるとも師直を貧ぎるから
忍び「塩谷の浪人推参して主君の敵を討やうと覚悟る
吉直ヨ吉野氏ト言ひつゝ忽ち首を打切り坐すの首せ

吹ならせバまさのや本蔵の手下ども顕れ出る忍び装束
族をもふうみづき焼きて師直の首を振袖に包み庭の
雪間へ出ける狼煙貫ハあけれど中天へ月を顕めて立
登れバ是ぞの合図か西南に向ひて拍子を寄せ太鼓
雪の夜風にさえハ是ぞ聴ゆるもしも忍びの者ハいとすやく
雪姿の西の囲ひ堀にかけてよせる刎橋を内より外へ出
渡し各々此所より走り出れバ二人の女を介抱し同く続
ひそ出さうハちゝ闇平在るのみなりけり

知る時は世に書伝へて越えたる事相違の
なきまでに扁屋者の批判もなりん 撰者
元素この雑伝を支は本傳満尾の節に記す
物語に記すべきなり

此時師直を押へて其身の疵を清気に貫き廿八
則ち立林氏の妻にして義士と内通し今宵の
仕義に及びしなり長屋の尾と窪多ち所に
住居物の法師賢子を使りにして世を忍び四十

余人の近臣を専一と公げけしとなん猫の尾の外に
五人程の女を高野の奥へ入置しなると唯七の妻
せり且唯七の嫡賢子にも義討の時に隠れ仏門に
這も又後の巻に著べし
家に一奇なりの外伝なり其家中疑義なりざる者とて一人もなりざる
隠んで其家中疑義なりざる者とて一人もなりざる
中に別て義士に悲しきの疑義をせしのなりしと

ゆ所へ鎌倉の南の通り酒川町とゆゆ町の妻家ゆ
住ふ女ゆり歳へ廿七を三つ四つ越ても寡田の潰し髪姿
形容の美麗けなべまざるゆくゆ廿七ともるゆざる極ゆ
見ゆるなども今年五家の小児もゆりて初久苦労ゆ
月を送なべ貧窮と公の恵み入りて只ものゆを
大切ゆゆとり育る不貞中も夫なき身ゆ食客の人ゆ
等しき昨日今日伯父とゆ又どもその實へ他人なり
けり悪者の強八と りゆが同居して此程ゆるゆ毋ゆの

者を養ゆゆを図ゆりけて 強八へコウお民 廿三方ゆ伯父ゆる
ゆゆご雲を拵む拵ゆる ゆを助ゆして 便へと日を ゆ
居るゆ今日を 何日ごと 男ゆ十二月の十四日ごゆ即時ゆ
大勝日ゆ来るゆ 餅米のゆりてもるけりゆゆ業を 裁算
隠ゆ ゆゆゆゆ 文ともゆりゆゆ公のゆゆゆゆゆの此身ゆ明日へ先 須
債と六貫の銭と貸衣具の損料を二メ四百巻ゆゆれゆゆ
ゆゆゆゆゆの銭ゆ 米ゆゆ 質ゆ 衣類ゆ 渡して ゆゆ 紙
袋ゆ 持て 行て 銭ゆ 「ヲヤ 私の方へ ゆ ゆ 類へ

良雄が
深慮
兩士豫本
意を遂ぐ

世も有ません物ヲ　強ヘて世も公儀が有ッて三月四月の
間ハ覚悟をなさるべのご七月の廿日の間ハ此身が都
合をして養ッて遣ッたのゴゼ何所へ行ても安間と
毎日が活業で居ます所と申ハ押が強ッて来ッて
ヘヘ〳〵支でも八月の十六歩ハ入用ごと申ハで
私の夏の衣類と冬物を五六両ばかりのお金ハ有る程積て
お出で其後お返しゴ有ます丈ッと入用ハ
有るごとらハと思ッて居ます強ヘヤイ社うげんハ衣類ハ

を吐出て其時ハ此身が都合が悪ひうちヲ借て持出
さけまでも不残引のこ仕舞さのゴヲ　ヘヘ
後ハ今日まで活業て居さのが何の時の衣類ばかりを
満足るものゴザ〳〵しの　ヘヘ其様でも其様ハ毎
月の入用が足ッても有るひがまへ　強ヘヤイ何でも角でも
有るそこなのが盗ハ主ものゴ方の衣類が有くヲ義が衣
類でも出て不残出ッて五メヤ三メハお来るごとらハ
そまごが居ますべ昨日隣裏の老女ハが然ッと言ッ旦那の

世話ゐるが終やア左程をまべ兼に貴人がなることゆの
うぶ直ふ養ゑゐ半門て仕まゐサ その方が幾程楽さ
知まやア仕ねへ言葉こしい旅へ立て初て二年越ゐ
るまで優うも為る人を飼ふ七月日ごろまれる
ものゐ 三八十二 年まで初して居程とゐふ気でい
なうまもんョいよく優りがるひ程るふべ兼童を他
所へ預けて私まやア一生涯奉ふ出て仕まひまらへ
ト涙ぐまるお民のお本ゐふ悔しく なうけるる表れ

と言ふ〜〜ふうゑ〜〜
夫世お民のこゆへなるまで世ろふ暮き婦女ゐの
身の上捨命ゐる其ゐ所へ咎ゐきものを咎の
なう程ゐ誘ら是こぶろの銭度を作く
ゐく言ふらまてう此ら是てう親〜〜寶ゐ意の
程着ゐ分けまべ血脉の人も他人ゐ劣り右たう
そ実殺さん紫こうくして艶ゑなれば表色を
表ふせて利徳を取ふんと好謀て完へ落し入る

強欲非道の者のまつすぐ身を苦しめ
女の姦邪なるが世の習ひ平日不足
なく親兄弟の親類のかゝりて居るものが
なりて不自由なる時は他人の難義も厭ふ
共余所〳〵に同輩を不便と思ふる人の稀
なり男女ふうぶつを世の中は性をうめて人を
其身の因下成行まで也憐を受けるが
生一の義理善根と思ひたりて他人をやさ〳〵

仕さへべ情へ他人の為なりて頼て其身の冥
利も往く尊き人と言うべし
強へ分ご兼の親父が深ふまれけるべ其身は一生奉公ふ
でなると。へ勝負おいろ考へて居やうがゴゼコ仮初ふも
此強八さるい伯父ごゼョ孫ふ其方が父郷が死ぬ時ふ
安ふとも出頼ミ中きと涙を落して言うこと家じ
成ナ此身が分て居るうち母ふとも孫ふ初ら
を引きさせるうと請合うべ其方の親父ふと

合しも此身を汚んで分の幸ひとうらん出民の親に
対して恥なきの世話をしたに呉ろと言ふことおわかりなれば
主後毎人が死去てからは分も角も此身が引張て
為て居らば今まで貴を打て居て今さら勝負を
きまとてうるものゝ實ハナ明日の昼までに五両の金が
出来ないけまじ其金の形を頼ける体のうぶ
マア三年だろう奴隷奉公をして呉ろナ居ごと言わ
ばへ引出しても勤をさせるから左様思ひて覚悟せろ

丈とも明日までに耳を揃へて五両の金が出来ないうちは
本宅の米のも且那をとるのも一月や二月ハ勘弁を
致て米ふいサドル出ないけて来ぬ何ぞ先金を出して
呉れト言ふよう早く傷の出民の脱走し結入を小服の
抱へて出行て米ふどをもぐう藪けども耳に入実例し
養後なも見まとの出て行きけり跡の出民へ口情候憤
入りく泣御且正体もなく歎き居ろ打ろ男の思
兼へ毎人さん先刻の腹立を お呉且敵討をしろ

極ぶのごとくヨウ早く出しとお呂見ヨウ此身ゞ勇我の
五郎ごとくヨウ表の金極が左右のごとくヨウ　アイヨ
今宵しとよろへよ　踏殿の外へ出ると　あぶるヨウ室地の
所でお極び怪我をもろと行るヨウ　兼へ怪我をろると
内屋敷の　鄭さんが　帰りそ此ろれへトの所へ三四人の
おどもの衆　●メへ　兼ゞ極ヤもやくお出ヨウ　モウ其居を
もゞろのごとく　服装を持てお出るれへト
そ持ゆ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　
ちるもよ　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　

第三十二回

再説お民ハ其翌日極月中の五日の夕寝覚ゆ宵の
雪の風身ゆ寒ぐと思ひ入浮世のかの里ゆる風ト
世界ゆまゞ見バ児を育ゆ常並の准のことと
ゆ捨置ゞ居る人ハ沈ゆ沈ゆ行ぬ月日の
所ゆ早く迫月く春のまつけ　さ人四辺迫ゆハ賑ゞと
此身ハ此児ゆ正月の晴着ゆ着せるゆ心今ゆ
張八ゆ帰り来ゞ昨日のごとく情夜のなりトと七ゆ

あらんか幸甚と思へどもちの命の半分をうらんこと
さぞハ気の毒ハ非道を行ふて此児ハまでもつゝく恨こ
つゝ清き貞ハ命をうらん心中ハ清きうるうると絶を
痛よろいつゝしきまぐ案ずれ娘も児を抱しを
親とハ甲斐なき今の落命をうゝ涙の一ト雫
流麻の顔ハたゝくとうゝ見バ小児ハ目をさまし
首を上へ母振起振ヨウ 民へアレサまぐ寝ぬうるま
家堂と此麻ハ温まるとお在所時ハ母が起て火を

うゝこゝと毒薬を温めよるうまぐ起るのだハうのよ
ドレ母が先へ起ませう 義へウン此身も起るもの 民へ
寒ひうゝ麻しとお在とのハ 義へイヤ今日表の
老女さんの所で解をつくうゝ早く起て来ると
言さるのヲ 民へヲヲ早い所のつき振ごゝ 義へ此月の
所でもたゝく解をつゝとお昇ヨト言うまて母ハ絶ギヲ
クリ解を巻より持ひうゝ節季の中の憂思ハ
年を越ゆ安うゝね母の心を児ハ知らぐ人並くゝ

なんぞ
なのもの出来ると思へどらしさ奉公の為貧しく居
業とも節句だけ楽しやどふ仏知くハ知るまでと思ふ
もう焼たらうくと鍋の落しと釜元へ立て知げの烟さえ
細くくゆらす火うち箱ありがちなるこれ住居のこと
高きとなる母まの体形る中にも美者ハ元気よく氏
身ハ老女さん所へ仕ヨウトたれ配当べ 氏「アレサ宝ハと
ハのふノウト言ひつく麻名暮の其上にもせく合
まる前後ろまし〜糸の付紙も出り合せず悪けるべ

空ふ入られ行丈も短く赤形暑手伝ひて直ふ表の
方へ出るを母ハ悔とぶ 氏「コレサ坊ヤ路ど悪うあれ
氷が張りて転ぶるうち大出〜歳ナヨトゆふを出ふ
雪なら路次ハへ出て行く手脊後なげを見送りて
内ふ入らしが焚火ままで消る男ふ猫まれの廉へ
祈へて居うしが名事ゆふん路次のふふ人変まく
来くよりも名ゆるう変うまく大出〜ゆを耳ふ
岡ど出の風変出て見るも雪うう〜新へ相もふ

内義の愛ゆえ　皆へお民さんく大変なるが出来
うと早く来るヨ至ハとろか食ハねヨトきれてお民ハ
なるほどなるほと藤みを明る出合がらら又もやく来る隣の
左衛門殿　左へコウく　お民さん　お茶の行の為さんと今
裏を通る大勢の侍が血の付た槍を一ツ有うたを
行て仕まつさせ逃失て行て浦まりて連て来る其
武身が行て連て来て来り度が五六十人の黒
装束が槍長刀の抜身を行のがら帰らて来り

つ
付て人ト言ハて　お民ハ胸ら　ぐらき周章狼狽して
路次抜を　ふ　ら　ら　く　欠出し　見ハ　佳来　群
集の　人く　欠て　行　帰　行り　稼く　騒の　実ハ
何と　宣ても　ねど　も　逃ハ引　行　一群の　人数ハ
夫ク　事道を　激立て　南へ　き　ら　を見る　お民ハ
狂気のごく　下　秋　倪　捻て　素豆　とり　我子の　姿を
最ハ　ゆく　時　塩谷の　義士の　勇く　主君の　仇を
討ハせ　最　ゆ　ゆ　ゆ　其勢ひ　今ハ　世ハ　四ツ

るハいさゝか亡後も名こそ惜け是途中にて逆人の
来る事なかゝバ備を立ていさぎよく敵を引受け討
死せんと四十余人を三隊に分て相列の行列の
後ハおくまで大鷲文吾文武の達人風流の友ハ
途中で逢しゆえ一度よう迄ハ行く折ら大切な
男の児歳ハ四才ゟ五才なるゞ文吾の側へ大事つく
児へ伯父さん此身も強ひから
故おをまるヨウトハを同ゟ大鷲文吾完ハ

笑ひて小児を抱き文〳〵強ひナア伯父さんハ抱こと
行ゟ帰ひるハ小児〳〵ナニ帰ゟアねゝとアハ此身ハ
光る両刀を持て居らアア文〳〵鷲ゟ文ゟ
お鎗を半ハゟ小児〳〵お鎗ハなんまり大きひから此が
身ハ持ねゝヤア文〳〵〳〵文ゟヤアとまこと半ハナア
ト絵ハ付ける金の板冊取ハ何て渡せバ腰ハ気に
笑ハて帰ゟ〳〵ゟもく抱き行ことを可笑けれ仕来の
人〳〵ハ此体を見て後を追ハ一〳〵ゟの血の対こ

強八郎
兄
阿民を
苦しむ

絵を おさえ人が小児をさらつて行ぜ。「ヲヤ〳〵可憐
そのあわれの小児をなぜあるごとくふなり「あつ人貴
ゆゑもまるのごとく。「たつく宮野の屋敷へ歌対面行
たのごとのあるごとく宮早人貴八入も仕史。「あわ
あそも姉ぐらものでは捨まて行とのハ奇妙な児も
ゆまべ有ものゞ「そこコウ塩谷家の浪人ごとものが
実正の然うろノウトのふ中ハ為義士方ゆゑ異
るゆゑを使うるゞ先ハ立うる赤敵の音ドンく

と歩出其ハ二の段三陣合図と流人一同ハ立出
四十余人ゞ列行ハ並んで各く得物を進元第後
左右ハ心を配り出も中所をなさるハ義ての測様
遠まきうろんと後をまぜも云伝人恐しの様ハ
らで斬る処へ大驚る文吾〳〵彼小児を抱きし怪ハ
対き 文へコレく行岡氏ハ行ゆら其のものハ鳥ハ
小児ハ大明らしいでハふどぎらぬる殊ハ我くが異様なる
形容ハ姉まも其ハ同伴ハ行ハと側をくまるく

扨はもうあの人ぞ抱て是まで来りしが此児の親達よ
さぞ驚く天ー脊後うらう遅うけ来るもあれぞ今更
大きな瓦かりのは推量致ずイアハハハトうち笑へど
片腕も同じく笑ひ片へ寄やど是ハ孫ーしの太郎の笑へ
うきさま供でも我くも恐るも世ぞ貴公が抱まて来る
兵八通まで勇気の見元中に元君のは在世
あらばは側へさー上へは一具ともなるのまるべ成
人の後は用ゆも立べきものぞ在ト中ふまと

押さ藏て歩みまた一同は行列揃ふ歩しも孫元
集の中を大抜て京り近付く彼お民民へモシ伯母
其児をお返ー成て下まートー涙ぐらう大きりう
民へ夢やサア母ゲ来ーヨ早く此方へ出ヨトいふを聞
ても義兵八平気にて来イヨ母人さん坊ハ伯父さんと
一同は行ンゴヨ丈へこまハ迷惑のサアー母は
抱こしへ同伴ふ行ムト母の方へさー出ー丈へイヤ母は
堂あて案ずらまさらへ悪義で連て来るのぞどぎ

らぬ同様に行くと抱き上げ可愛男子を母の
紫ごは気も付かず放心く見まで連て来ると我こハ
菩提所へ来りて切板をいたのごとく小児を連てハ
行き給へ〳〵と云ふ懐中より包み一金を財の
侵ふ小児に持たせ鎌倉下まで帰り一文「サア此
お金で母にうんと買て喜ぶのごヨト言捨て
早々出立をお民ハ驚き金を持ちながら大雲
の渡賃を見やりて考をうけ民「アレモシ上人様
お金を盗まれしと申さば大雲ハ何ごの雲
と疑ふと申すもしばらくお民も今さら
詮方なく金と極尺をうちながめ民「善哉ヤお前ハ
帰くなること久義「イヱ面白うるヨこと上人のごヨト
金の極尺ハ何ごも包み一金ハ貝もうけねバお民ハ
安心せぎ見ども金の包みを懐中し我ごを抱て立
帰る道中で聞バ往来の噂塩谷家の浪人が高野
師直を打ち九て関覚寺へ引て行く敵討の人〻ごと

その實こゝを云解る堪の海時ふかけ波瀾無とは

見まとび

山級きゝ力もも折く松乃雪　子業

ト云ふてもいまだ大きなる見を知らず人て我家を

さゝとを帰りける此お民のうり出編は妻〜

正史実傳いろは文庫巻之十六了

正史実傳いろは文庫巻之十七

江戸　爲永春水著

第三十三回

愛ふ有しき物語り有り塩谷の家中にも其名を

高田軍蔵とよものかに役人を勤めしが世に

有る者にそのころ世の中ふ怜悧け見バ判官在世の

其所へ行ものを勤めさせても人の先を潜り抜て

行やどひぢうきき変ゆてもかに気味よく取捌さり

とも用立者多きゆへ其為ところ実情あらば主人の為と見せかけて自己が田へ引く水のごとくなれども
遠く迂道をうゝろ人多きゆへ是おそれバ
いさゝか他の恩を受ざるのうゑ権家ゆへ取り入る
ゆも分九郎丸がごとき者ゆハ彼が得づくを計て
其欲情より心ゆ悦び大量がごとき忠臣ゆハ其人を
もつて取り入るべ多くハ是ゆ欺されて心をゆるし
者もひろしゞ世良を勧ハ思ふ深けれバ軍法が

言葉多く軽薄なるを知るゆゑゆこの人用ひざりし
とぞ。さて白者ゆゑひろしゞ此度の大変ゆゑ既に
籠城ときまりしとき一番に駆付け着到振
ゆも軍法が第一番ゆ表面ハ忠
義と見せかけ内ゆハ討死と口にハ言へど心ゆハ
表裏を窺ひ若第一番に討死と定らバ用金を
惜み ひそかゆ城を逃出さんと心ゆまへをかゝり
けるさるべとて義士の面々ハ金配分とりきハまり城

退散の頃まで八郎左衛門と居うしゑ対入のまま
逗葉小山等と倡俱ゐ不理屈を言ひ出し終ゐ
約束をひきしゑ義士等貢尾よりく敵を討たる者の姿
花形圓覚寺へ引取る極みを軍手傷速くも安
出しと其道筋を考へ金田八幡の近所に結
うけ義士の行列の来るを見るより軍「表海岸にも
お出ましく柄こと恨お茶屋でゞざわ ヤレく天晴み
働きト一個こゐ挨拶まれども皆軍手傷ゲ不受を

感ぜず雖一人善ふる者多く笑ふ振と佳るとしゑ其
中にて新聞屋が我〳〵四十七人ハ盟約を堅く
為て亡君の仇を報ひ今引取るところ見れバ余人の
挨拶ハ義ふるなト言ふを軍手傷おゝ久し軍ハ
さる四元の四ゝ石ゝ私ごゝ先達て逗葉小山
等ふ感ハ さる四連中を慰まゝ ゝまど其後
陽ゝ考へく見ます ゐて四連中を慰まゝる
のと羅くぐんじまて けまども今更改めて加へ

軍兵衛
浮薄途ホ
義士の川揚
祝ス
矢兵衛

軍兵衛

下さるとも中さるべし あと男八角まもと 其田八幡へ日
参をのべ 柳亭各方の首尾よく本望をとげらるる
ゆうと彩拵をうけまして 拾ゆう 今日 山行ゆそ
出見ふうるものまぐ武運ふ 尽器ね処とかりぐう
ぐんぐ まもれバ 是より 直ふ八幡へ 山陵参りを致を
ゆうぐどぐうまぐどふぐ 武肯 元老たぐ 皆くさるへ
是ーハト言ふを 半分 空ひぐ 矢 手陣ハ もくくさり
ゆくゆぐ軍 手陣ハ 是にも 祭りず 一樽の酒を 抱く

開覚寺ふ 参ひまうく 門番を 呼び出ー 我等ハ 当田
軍 手陣とのふものるぐ 今日のお母 拵を 続をる
且ハ お労を 体あと 四の 酒一樽 拵参りーぐ 拾年大
里どのを ちぐふ 各ゆも お見ふ 掛りうとのふぐ
門番ぐ 武田義士等ふ 体ふ 長ば 義者どもハ 関ひ人ぐ
ハ あくーる 面の皮の 厚い 男ぐ 先刻ハ 途中を 騒ひさ
機を さ手ひて 騒ぐへて 居ぐ 武所へ 来ることを まことに
幸ひ 不義の 奴等の 見せ ふふ 端数 ぐぐハ ぐる

まりつ。へる極老ハ杜い魔く切りて人刀の様れゆ
端敷きうと大男ひつきりそ我くゞト立上るを宴会く
助ゞ押とゞも由へ老ハ各方那中る人非人ハ對
面をるも同の様れ酒も入有るのとりあて強く進め帰
きるゞしと言ひつく更に取合ハれば彼軍を勝る注
方をくまどくとして立きりける
此一段ハ義士等貴川家ふ出頃けの物りれ矢を勝ゞ
物語を折円伯某ゞ聞しとりるを書伝ふ記せり

第三十四回

昔の人の言るるひりう命ハ天ふ有るもゞ只其人ふ在を
ふ是汝ふ出そ汝ふ還るるりめるり世ふ講むへまハ庸医めるふ
疫人ハ数稽のき命をひやまろうまく論ふ来ゆ出るり豈
おそれざらんや吾学文貴ふしを故人の法術の論もあらゞ只
権威の勢ひふ宗ゞと薬品の能を毒ハ無へまゞ身上の服剤をりと
そ病人をひやまりきれどるる業論ひりを屋敷きるるあゞ
まれ行束の鉄地玉横ゞり方のまゞれ巻り思らゞを相をるを

いつ事とて過ちの今各といふ古人理を責て其法を立て薬十
二味の調合へおのゝ薬種の功ありを立て持合しを病に
きたるの加減あるを我作ふ磨ふ丸べし此一味の除べし
いさ痛くへかゝべしと十調合を入れ人参と己が供屋の上ものを薬
用うへ其功能の落きふ仰くうり蜜へ大根を煮て喰ふ時へ
その味甘くあるうしたゝで喰へべその味辛し薬種を見ふ異
毒茶裏じて薬とあるへ稀ふ物ひうを盗うべし薬をいで病を
いやまう薬遠へいと多うへ権威を上ものとして長棒ふ未週う裏

卑の給人金も無当代で若引勘定自分袋で病人の汚れを
除と不礼をあくねあせ庸医ふるゝを痛され欺られる法ふいい
藪医者ゞ猫を盗んゞ物ごとふ茶給さへ持されどこるを嫌へ
押込て呂をきたるふ欠歩行貧医ふうをを良医をあへ命ゞ
惜くゞ物のへ人をもとあて薬を苦ふ考されども見を一法ふ
物ま定規をいあい不可う爰ふ鎌倉本座の今江町の大医
あり長へ僕の部屋と物置の中を薄て長家門長屋へ成ゞ
造う丈紙後形の腰張もいうを糊豆腐のうう

主刑問合

四時限り遠方の病人頼り来れば札腰掛へ見見ふふ
張出しとろん高の師直が枕へ医者清奥野蝶庵と甚頭
名さき義医者り取次の若侍が表居を海老とつく「只
今青山辺の者とうふどうまんが当人に同道いたしませば
容体を中上が茶をやとうまんが尚人を召連れまうまんが
お見通りいたしと委しくやとうまんが嫁へ幸ひ
茶取も同ふまつと愛へ通参れ 竹へハイうとまうまつとアコン
青山の辺方あらと人が通り義まート顧れべ町人体ふと見れ

ども羽織小袖も相変の身のまつり表屋敷ふ身を突て張
まげる 嫁へ貴様ら青山の辺にるでまりまで間違ら仕まと
私い青山辺のものでおざりまるが私親類どもの将を法人が
急まりと本町の茶種店へ奉公つかり亜まりと所ら遅
上とこまりとどんじも寄らねるを口まりと内療治で本復の
生まりとこまりが茶を頂戴いたしまと夕涼尚人に見た
いたしまんが嫁へまるかと遠方ら参りごまりとこのあと見て
生まりとうが全体珠の外ふ方用ら変く新規の病人に引まと

あるーー此方へお出なされば療治へして進ぜまする愛のとぐ
めそのお方へ松茸入て煮るものゞござるテあるーー医者と鰹節茸と
つゝて見ねば甘味が出まねど逆上一度乱心癖へ実へ治る
ものゞ此方へよう望んで療治して迷惑でも直して進ぜるこの
潮来茸の文句に醫者の薬礼と深山の獨取ゆやりまして
さて次第をぞこのゝ人武天皇の時代尚時一貼ゆわど
一ト回りの極と極て毒茸汚わいふしませねど代へお戻りと
中てへ引張りまるものわけゞ病人ゆよりて茸種も高價ゆ貴

ねべるゆゝ茸代ゞ七極そ極ねべのゝーー少べテ変てる病
家ゆ三べゆ人調合を仕まべ蚤ゆ出てる毎日夜更て帰るな
もねべ茸へ松茸のゝ病家式馬ゞ色ゞとのゝ風ゆ引られ
之ゆ茸ゆ来ゆゝ「その茸へゞ」いませぬ食味さいゝ茸へゞ番
金ゆさーー上まべ松方の病人へ老角真茸の代をもまるを
とゆ口癖でござるまべ嬉へハテ茸ゝ病症ゞ病症ゞ猛
ゆゝと貴の病症茸中の病症ゆ茸ゝ茸ゆ用商の
療治ゆゝ茸ゝ悪茸真茸の虫のせいでゆゝ「更へ物ゆ茸中

の虫と中きも酒盛でごぞうもんなる〜〜 婦「元の兼相とハさすがに
ごぞう一四ゥ茶代金八両でどざるがどゝでもあるまいゝ 「モ性 高出
で冥ゥ ごぞうもんゝ 婦「ちゝぶべ六両 「ゥ性わ〜〜ゥ〜のまう
ゝ安うごぞうまゝ私の方うゝ七両さゝ出ゝ 主人左様ゝ
明日尚人を同座いたゝまゝ七両内の茶代金八両さゝ上ゲま
せうト直座ときめと懐庵の接殺ゝ 彼町人ハ浮ゝ 婦「ゝ
然ゝ見ハゝもゝ病家ゝ初のまゝゝるければ常ゝ春を
さまゝ理草ゝゝハテ翌日ゝ内の金八両分ゝあゝる 後ゝ

ゝけまゝべゝトゝゝふ家のゝゝの九ツの時分チャンゝく
此濃国野瑞庵とゝゝ元来横ゝ赤猿の者ゝて 医
谷家の童役小野九太夫ゝ壮年ゝ身持 放埒
ゝ若の動ゝを慕ゝ国を遍れ 鎌倉ゝ医者ゝ
ゝ安留地面の夢冥賀 養子 嫁入の婦人七世ゝ
まゝゝ表ハ医者のゝゝれば古主判官の敵 師直ゝ入
さゝゝゝゝゝ師直ゝ権威ゝ出入ゝ多く此今
町ゝ家他七威勢ゝゝ身ゝゝければ居ゝゝ

唐本を積み重ね得難き奇物をもくべる方医と
のみへ家相のるとと思へ仲景と扇の異名時珍とらくへ入
七の雨が四ツ目屋とい人数を除し一人ありて本草綱目を加
古川木夢へ旨目の人と思へう七を持し紙有ふ下ひ合
出る苦労もるし罪へふ都同おれど民世の中を堅ふして
口先だろうで病人を騙し込むことを危ふけ是却て
青山の町人ハ據庵が貪欲うるを嫌て素知の
うふるゆや翌病人を陳て来ると熟く楽を

呑込ま世其次の日ハ本町ゆ一番大きの薬種
屋へ廻き據庵の偽多紙をきし出しるから町人へ其
多紙の品が急ふ入用ざるら私と同道ふ見世の
お人ふ持しと勝載しとお異る丈ト言ハまて薬
種屋の亭主ハ其多紙を熟ハし 亭へ〻五真
孫が出入用と見へまて極高ふをとぎるまた
うら宿ふ有合世まて所を移く取交ま七出覧ふ
入まま世う 町人へ危も角も者ふ欲いとふるで

蝶菴が
貪慾
霊狐を
計らる

私と同道ハ持て来て業人と言ハ是まで亭へ〳〵呼
今直ハ此同道のことさせまうト言ひるぐら店の者を
呼びて其由を言ハ聞せ主殿より真珠を取りなされべ
店の若者ハ身仕度して若ハ是ハ大きなお待せ申のハ
まことに浮具世さなと紅絹のハうら金沢町でどざるま
ちの町人〳〵角の長屋門の内サト言ひて二人ハ連立て蝶
庵の家にいさまべ郷町人ハ玄関ゆて真珠を清ら
を侍奥へいらしゃ姑くして出来り町人今ハゆく用

多でゆ〜ゑ間敷且また家ハひらくでおざれ今ハ沙汰がなく
マア一ッぷくト貝ゆ火鉢の傍ハ坐ゆて彼町人ハ
ゑ水場へ入ら此日ハ悪しく茶取病人ともハ多く入り
者ら立ら蝶庵の弟ハ出茶を業ひ女有て彼青山の
町人ハ同座せ〜若者の番ハ為ら侍が宅内ゆて何合
場へ通しける蝶〳〵人ハ本町の茶種屋ひとゆ久まあどゆ
流ら〳〵左様でどざるまた蝶〳〵とんとうまう引と愛へ来の人
脉体を見て進ぜまうトいべ弟〳〵私ハ病人でおざら

まゝ私ども今さら上すまして真綿ゞあるゝゝ入うまゝとうら代金ゝ
のゞ紀度ぞんじまゝしトのゞ 嫌へ 慢房うちうるゞき 嫌へ 義かゝ
そなたに義初ゞそなたゞ 嫌へ 病ゞ 発も 義へ 若へ 義かゝ
よろゝふゞぞうまゝあなたのゝまゝ居まゝ 嫌へ ハテ チテ 問うゝ
ものゞかなもの茶を進ぜるのへ 容体を見ねゞるゝねト 玄関
の方へ向 小弥ゝゝト 取次の侍を呼び 嫌へ 此本町の若
元の隠居ゝと青山の 仁ハ 病ゝゝと早ゝ 変へ まゝう 老へ
いわぬう 小べゝゝ 呼今 も 水湯 うゝ ゝまゝ ゝまゝ

嫌へ 隠居ゝゝものゞ 若へ 私ども 遠方でゞぞうまゝ 真綿の代を 頼
まゝ 嫌へ あなたゝ ゝうまゝ 病ゝ 義かゝ ゝト かゝゝ 込 嫌へ 貴
様を 隠居ゝゝと 男ハ 貴様の 親類 で 本人 ゝ 明日
此方へ 見へゝゝゝゝ 病気の なるゝ を 嫌へ 今日 連 まるゝ
療治 ゝ 呼ゝと 頼まれゝと 其夏 様の 代ゝゝと ゝのゞ 全体 病 表
ゞゝのゝゞ 嫌へ ゝゝ 変へ 寄 ゝ 寄 ゝ 容体 ゝゝゝと 見て
茶を 加減 ゝ 進ぜゝう 若へ 私ハ 青山 様 親類 ゝ ゞぞうま 貴 呼 本
見まゝの 隠居 ゝまゝれゝと 此ハ 方の 内役 ゝゞぞうまゝ 嫌へ 本

時分も長く遅とのこと聞るに長く遅へやど
教ゆうこひかくへものへ長へ人へ茶種屋の若者腰を立て
遠ひと私のうのせどまうまいろ真蓮のやさとやとれが乳遠教
教ひ中乃びま長代金をやまりは　嫌へ貴さあい乳の遠ね
うりうでも真蓮の代を教へいが病でそまで遅とさ　善へイ夫のる
たがい遅とるまんこのせどまうまい高金の赤お教るまれて千代
金をやまれと中せば夫が病ごく〜と金まるお渡〜るまんれど
どうまるる思ちどおぐうまいお入ままどへ真蓮を遠返

ぐうまい　時分が遅くまうまいへ親方のあるも軍くどうま
まをぬトのへば嫌ちかうこと　嫌へ言へせて長ばとそのおまあとと
此嫌庵へ生方うう真蓮をるか異物うあへ乳遠ばんべそ外
病人ま長ちと居ることが関うでく遠或ごまんるる乳遠ひへ遠遠七
仕ま人異竟金の両前金をやて七藤治と頼りとのふゆ人真七
嫌へさまと言とのうぐ其上るうど頼人ご尚人へおるね人ごるどと
るる森くしまとのの町人ま町人ご仏新人れうあうとうはまとと
どぐうまい仕度ゆでるまあうまうる言まままん善夫へるうさ方の

ごろうて
四勝負のお供しゝ跡ゆきろうまーて真珠ろう合ろうまーとも早く
あるもを教授やさろうまー 様へ主人貴さるの病気ごを歩ーて
早ゆとりふのご 若へ見いあまー人さるへ私をお往ろーうきれを氏ろ今朝
見番まで四文通ゲどろうまーと懐ろう様庵のる紙をろう
ぞや 一ちんを四貫やさろうまー かるさの四名れぞ私方店の名号ゐ
相撲へどぞろうまー世ぬ真珠も拾上京 北八六双ろう三十双位ゆ論
別ふ伊勢真珠と紀州と四貫ゆ入まーと其真珠を変へお公
るまれて四貫るまれべろうまーと差ゆをるる紙い元来るまの

様庵も年い信じるゲゲ鯨ひりや彼町人ゆ騙遍ゑんぞろハテ
今氏の約ぬと思べひーとや久兵衛ゆ若い者へ道上の病人るいぬ
言家ふのそりゲるをとまゆまそ吐息つまー呆まとそーろるぞろうろ
これ
見ろう様庵へ業檀屋の若い者と支ふりの拾家をろーろふ
彼青山の町人とゆ様庵のゆるろう伊ゆ紙を持て本町四
ひーとや久兵衛とゆへ業檀屋を賺奪代金三十両所の真珠
変詐取てもの渡義を様庵ふ拾ーろう斯てあろべきろうと
ねべ業檀屋の方へ様庵のる紙をりて公聴ゆ呼出んと

きびしき掛合止ざりけるゆへ從來煙庵い身ハ舊悪ハいれへ大の
迷惑ハ内分の扱ひとなり見もせぬ真珠の價を渡けれども
ものの自然と世の風聞となりけるゆへ却て戸岡伝右衛門
鉄砲洲の住居ハ眼病を分て既ハ慶治もなるべきを原
元辰（数年前）の方へ下る元助事ハ浮絵き真珠を持ゆきて
賣渡をこのまけ見べ漸ハ病全復せんとて元助ハ傳右衛門
ハ國元より尋来り賣病おこりてなど実義を尽しハ中途ハ
妻子ハ下る元助傳右衛門方へ尋ね来りしゆへ家僕元助

二個ハ賣病せし元助ハ一通の書を認しと
くさ消をとく失ひけり其文の写し者畧左の如し

是まで伝ふ元助と姿現し貴家ハ賣病
ハ
教しハ此度國元より家内の者元助ハ
乃ち連れ別墓住ハ府家事者の分れも
先ずとどんなもの眼病も遠く今後と相違なく
見まもり存ハ眼病
ものゝ人ハ
ひと加養ハ一ものゝ元辰方へ真珠沢山

預け置たる金子根葉つて蔵は覚道中
風呂敷有しは庵と申は着る○野九
太夫男九十郎にて古主を國家を願敗地
内通を着ける通力萬天○と養ひし老人
どもは藥種久しき参旅有巣難く難奔
悪度授業を相用ひ儀盗むさへ氷に消しも知識
る武力捕本望を時に臨みはつがり藤助力に
進し申れ

傳右衛門夫婦をたずね於坂元助も主を見て我へ嗟き或ハ
憐み驚然として徐に洩しまた本心見まで元助と豊の人主君の
別館なる稲荷明神のつれぐが真意を憐くのみ神慮の
雑さる怨魂ハ徹して勿体なくも数度の感涙とぶ
淺金快して夏の淺茶を主君の後室瑤泉院に告しるべ

神徳を尊ぶかのひけるを後義士の聞く本望を遂しゝバ稱
慮の驗を聞るらゞを正一位元助稲荷大明神と今の彼地に
崇め祭りて聖人の口碑の残りしを元助稲荷の垂迹紙ハ
某とゝの聖正の家に今に伝へてゆりとるん実へ
亦曰此庁是人元藻倉の宮で府ゆりゞ此の後函元の
丈の[illegible]住居再度藻倉人出しゝり個一些のるゝれどもいろく
[illegible]命つゞきてかゝりるゝ[illegible]ゆりしまり

正史実傳 いろは文庫巻之十七

正史実傳 いろは文庫巻之十八

江戸 鳥永春水著

第三十五回

今此章にあるせゝハ諸書の中より実のるゝべくゝ
自然の類ひをうゝ出それバ根拠方の人ゝ
ゆるべきゝとど九ひゝの物語ハ手世の体を深く考へ推
量りとゝ面白ゝを思ふ像下ハゆりぬべゝ個し物語
るゝねバひゝ演ふ人ゝ実兵書ふ文人に

霊なり生産善を主とし祀を除んで風教人道明路
なるを神霊といふ生なる中の人を祖の人を主仁義を
祀を除くとも道を主とし心魂魄識なる人を主とする神
霊といふ大里由良を勇八祭りてうらバ一社の神霊ともうるぬ
べし六十余州唯り此人を尊とまぎぐん只あるとのみ見るべ
あるべ忠真仁心の源を思ひやりて其身の鑑とするこそ
鳥の跡をうつす筆を人知るべ

狂訓亭

雅歌

たゝみ寄しへ知せしハ後鳥羽の院ふ系勅撰歌人大僧正
隆光院の使僧人を八しるる返書の七大里氏の
自筆なり

色ふ角に思のハたるく身の上に
たゝ〜遠の　　ちもとそもゝ〜

這ハ婦女達の着ものとゝ〜ぶ類のあらねど九義士の妻の
歌ハ空ふ書残せ〜及古まだもうゝ〜其ときの
ものゝ中ゝ〜ゝ所ゝ〜ぶや

花の雲空も名義ふあけゝ　　大星良雄
世の中ハ春の巨燵のゝ心ゝ　　同　良金
ゝゝも韓世ゝ〜ゝけゝゝ

二百里や我窪菊ふ菊の姫　　木村貞行
蟻蜂孫とふ書ふ

大星の辭世

水ふかうしる花を藻くずふかく入て

白ひたりを庭の梅ゝ枝

今ハさやとの葉もあらけり

なの落て霧ひとぶらん

同書ふ一説ハ義堂の先ゆハ以書あらゝ出ども

ふしよふぬるもど赤主君ゝる人の臣下ふ猜ゆく

非道ゆる人家國を亡し子孫の絶るゆ和漢にその

例も少ゝらず塩谷家の滅亡も深き怨念の報ゆる

ありとのふ夫ハ大丈夫魂の人ハ必ずけり笑ふべきゆふ紙

なまど妄失の罪ゆんどふ猜ゆき乱を逆ゆば怨念ゆの残

ゆ花ゆりを世ゆすぎきゆのゆハ必ずゆ主君の威光と上ふ

ゆる人の勢ひふ募ゆ居下を恥しめゆを猜ゆく

ゆる人頼て身も家國も亡びゆるゆふものと用ひゆり変

変ぞらし赤上ふ立ゆる人ハ常ふゆゆを恵ゆゆゆ

ゆふがゆりゆ難ゆゆゆりゆ難ゆゆゆ

大星討入ハ以
前所々へ贈ル
遺書或ひハ辞
世ハ
認む

理ふ くらきものをて不便なるものどもをうと思ひうめハ
ねバ後悔するものゝ多うるゝ 夫を奈何といハ愚
なるものゝ癖として是を恥ゆゑ報じ義理を不思ふ恨
利欲ふ累るゝ輩多けれバ仁心ある者も是相を見し
て 勿論あるこを止めて刑罰を烈しくせらるゝの
みゝ 塩谷判官ゆハ臣下を縛ゝ民を苦ませ三
あるゝ言葉より三代以来の君の時ふ不義の強り
ゝを清直の家臣を非道ふ刑罰行ひうゆ

変ひりけり 蜻蛉線○とてふ塩谷稲用正の時代ふ最後義
ある家臣ひりて金奉行を勤めひりけるゝ或時金銭ふ
盗賊入りて千両箱一ツ失うしゝ稲用正義せら
るゝとも一向ふ知ゝ毛ふ依て金奉行の不届を
發ゝしるゝと厳しく役を申て処ゝ
けゝバ彼者の返書ふ拙者ゝ預ゝ
我等ゝ盗人ゝと中けゝバその通りを稲用正ふ申
上ゝバ大ひふ怒り以の外の返書不届ふ思ひ

宮わ〜波が盗〜〜〜覺へがあるゆゑに左程の大罪
中を名ゝる事度刑法に行へとも遂に度人を盗
人に宮わらまとう筋まとども手人ハ出も知らざるこの
めそ出盗まままとるを越度とと親あをたん城
つまを取て盗人に〜〜きまうりと義〜を不法の
板に吹とせらまと播磨ゝを盗賊の當人と板ゝ
らるゝ士道の恥辱豈播と思ふ恥の當を
なまぢ有べきや備も城下の馬場へ彼人を引出し

柳の大木に結り付て面をさらし家中の人〜町人
百姓に見せて盗人よ盗賊よと大聲に罵り傍らに
取を与へ手後一日に指を一本づゝ切捨させ日に
廿日のあひだに切落させとう如形うまとび中をぐる山人を
盗賊の大罪人と思ふね者もるし悔呼山士の義命と
いふも勝りなんの義世の宿業ゆゑ此災難に恐
名を流し日毎の苦痛をせ〜るゝぞ是に連添ひし
妻子親族の懲〜〜恥うしさと悔しさ人魔ゐ

べし此時おのれ彼士ハ血たる眼をいからし歯を
噛み居たり我役義ハ外にの条畧と解るゆゑ毛髪
うけまで盗賊と定まりて此刑罰ハ行ふるゆゑ
あり金を盗みし者ハ外ハ別白なるとて
知らせんと武士ハ悪名を究めしハ骨髄ハ入く
ちらくうゆゑまで見よや我ハ当家の盗賊と
あり塩谷の家名を絶さぬ為ハ思ひ知るぞ
思ひ知れと罵り狂ひて息絶けるを見る人ハ身の毛よだち

ふるひおのく怖まぬ人なりしが夫より後ハ雨の夜の
陰くとする折ふしハ青くうる色の火の燃よう馬場の東
西を飛めぐり苦しげハ後ハ思ふく変にて。
消まぬうまぐ亡びぬる故絶果るを見よや見よやト
いふと思へバ赤ハがまとる変ハそうくと然ハ怖しき
心地ぞ通りうくとする者迷ふるハ怖く振ふ久う見
まバ家の横先より血を流し鬼火の光り物まぐ
怖ろしげなる顔のかうくと辺ハ正体を失ひし者も

来
多うしとぞ丈より慈悲なる人の不便に思ふ道
理
其の法を修行せしが手数ゆや弱其の海法も断ふ
止まりけるが其士の妻其の罪ふ行ハまでより二十三年目ふ
当り七月ド月日ふ塩谷家ハ滅亡ふ及ひしとの
這ハ花岳寺の方丈の閑居ものがたりふせられ
ぬと蟻蜂塚の説なりまことふ武士の涙き
殺生ハ多もなりけるゆやきうゆじくも悔しき
なりけり

第三十六回

今爰ふ説く物語ハ判官在世のうちより本国
より鎌倉在番の諸士の多る中ふ変胡平太と
いふものあり折しも弥生の上旬なれ四方の接も時知り
顔ふやとろび初て春風の身ふかうくと来る頃ハ人の
心も自ら浮たる中ふつきてゆくゆどようしき長
丑の観音開帳なれ群集の来潮胡平太ハ国元
より近き須来し者にて鎌倉の繁花ふ

けるハ勤仕の隙を見食ハせて草履を一個を召
連れ先観音ゑ参詣せんと途中まで出るうしろ
ふと向ふへ向ふ大切の用を思ひ出しけれバ
やそ矢を取つ玉し奥紙ゑ委細を認め供の男を
よび近づけて胡「コレ汝ハ大義なれども此手紙を持て
一ト走り お屋敷へ帰り大警氏へ渡ゑ屋敷をよりやれ
ヘイ出ゞけゑ差ありで行要のすを失ふなしと供へ
ヘイ左様ならバ此お手紙を大警さゑハさ・よりすれバ

先おゝ迎ひ遣すべし 胡「イヤ迎ひを関くゑハ
きゝ来て直ゑ来やと 供へヘイ 夫ゑ貴公さゑハ此
茶屋ゑ ゑ入まゝ 胡「ナニ さらく と様子を見
ゆ 先達て鳴野氏と同道で来りさら大さ道も
覚へて居るゆゑ 徐ろゑ歩行て居るうちゆハさが
退屈して来るで ひらり若支ともゑ途で逢ハさバ
観音堂で 待合さうト言ふを関 捨供人へ先来ト
方へと さり 行く先ゑ 胡平太ハ只一個無花の

太地ふ別ざるゆゑ解原の人と左処へ除け右処へ
除けて行くうちも懐と道程を場所ゆゑ懐
中物ふ気を付よト朋輩どもおしてきて只五
銭と懐中ふ心を付て性くやどふ来ぐね道も
長谷の地内にのうしわしも年頃四十
ばかりのそ本郷廣神ふ六分月代一癖ありべき
大男酒の機嫌ゲ道幅も狭しと歩ちう豆
吏と見るより片扱へ除けんと為る胡平太を四

倉武士とも悔つけん鎌と先より行為り
二本差人に廣い大道と明言じゃアあるゑ
身ふ実為つゑア宜呪置ふ出ふ
胡平太も念鎌と せ〜が素より温和の生涯ゆ人
胡へ十二磐と為さ〜宅ふ至ひの出合ぶ
行為ゑ人に身の森相ふ藤ふ作し吳
つゑ胡十二森相ぶと面白人盗賊と為ても
森相と人言やアぶ海ひ今実義ゑ

ふれ
此身の懐へ入れやうとのを見て取ること
其二腰ハ人おどし武士と見せうけて故ア是者を
たちらくみト言ハれて胡半太郎を変うものを家
外と刀の柄ハ是掛んと為ることいやく間違る
無法者ハ此ハ詮なしものうの殿の
お名前ハ是ハ思ハ桜を垂し胡八
とやたるゆハ酒がるる余ほど機嫌と見へる
ハイ此身がなやまり住来中ハ人も立
寄う冥程ハ了第為やまとト内端ハ言ハおどつけ
なぐり大男ハ酒がるる大きハお世話ぐ此身が後で
の呑む酒ハ故が気を受るものろ。ヤイ何ぐ其面ア
ろんぐと言ハと刀の柄アひれ人ハ七人見御ハ
さと腰の物ろ大きと中ハ竹箆ぐらうこの近
ろの名のうまて櫂甫頭の強八さ女が腰の物が
おとろしさハ仕掛さ出入を止ると言ちやア神ろの
奴ハ面が立れ人四の文の言ハゆやア及ばれ人ろアれ世

歌川
強八が喧嘩
買ひ暗ふ
奇縁成
結ばうむ
奉

ゐけゐ者を大小も羽織も袴も所へ脱ぎ盗
賊の正体をあらはしたる平蜘蛛ゝ弁しと喜らう
新う言ハまるのゝ脇ゝア硯とも突とも袴もゐ
ゐろ強八さゐのれ者に故ゝが刀ゲ立つものゝト
言ひつく毛尻を引まろう胡平太ゲ目の前へさ
つけらまを堪忍も寄うも是まをと刀の袴元ゝろ
げて既ゐ抜ゝんと甘ゝ打しも物見ゝるる群集の人を
相手ハ武士今一個ハ名ゐ風ゝる悪者ゆゝとめ

ゐまるハ如何ゐゝんと時ゐ汗を拭ゝて強ひざう
まるだろうにを止やんとまる者もゐる其人立の様ろ
ゝ「アレマア結ゝを卜言ひゐゐ鍛の人を抱ゐ平
ゝ弁理ハまを如ゝる一個の麗女胡平太のゐゐ為り
ざり娘ゝお嬢の立ハ位ゝ程でどざゐまゝゝ
お花をいゝまゝゝゐ者四ゝ名ゐゝとゝて卜言ゐを
強八変ゐ変ゝ強ゝ袴ごと男やアお民ざる故ゲ様ゝ
変じやアね入らざる世話ざを所放せ民ゝ「ゝマア

お茶もらうとうるおあ武士さうなんな奥を言うて
酒ものうる　酒へ酒ひも　酒まねくも入るもんうコよく
安けヨ　耶茶もうをこうるく　新こうらを素麦油一
枚で　宝　ずんじんを　ンつく　酒こわろ　酒
機嫌を茶の　寝入て　分ぞ　元　ある　物でも
いとぶり出　そうと思の　母公だうで　茶八　居
ぎヨ　帰るのを　待って　居こう　又　母公が　お宮まりの
お　後義もうる　芝　ト　物　ふを　悪く　帰る　乃　八二本

坊が　宝　ッうう　出入を　ナ　ぢめて　居る　所を　故か
邪ナ　ア　ナ　てうるもの　分でも　盗賊か　遠くね人
泥坊ご　泥坊ごト　寝き　ふるを　おしあづも　氏ア　ナ
伯父さん　お茶ハマアさんな悪い　知か　分　時　ぢうぢ
武方が　四ア　男　酒　けまバとも　酒　ゆうみ　ものく　郷
お刀が　お茶の　月ゆハ　くくらるのの久　居　新　久
行　鏡で　人の　顔が　破まる　ものうイ　分でも　酒
ふを　入　らまる　沢をつけね人　ドやア　子　男さま

民「アレモウ御帰り強情ごろヨト言ひうるさ
く繁かさ〜うる強うざ〜の簪を抜て 民「御帰り
なさうと言ひ出し〜ちやア男ハお帰りでもいるとのこと
元ハと言ハバ私の店へ来ないかんしん出来ない
うの強立ち形りのふるさのごうぶ手元
をとやうを手ひけまども今宵ハ持合ごうい
うう色をどもも宜ふして速く始末して
お暮ト言ひまして強八つくづと思ひて見まバ此

出入言ひの券りを見さ処ごなんまう物ふも成まも
ふく居ふ仍て接うねね那武士ご頼ふふ男ハ
立流ふ叩けども五分の恋姉をいざけバお
民ご言葉を幸ひふ宜い退ちやと言ふふを一本の
箱でも売うぬハ損とふを受うちまいと同方を
引て見ごう強「まうたうふねへ代物ごご
ふ箱ごなんまう気を様うう此場ハ是で強しく
やまうを命異加ふ盗賊ゆトへうぞいを利ごう

人数の中を勝り抜けしやくも新を張りける
お民は涙を見おくり向平太の袖ふ
擬をうつる　民へ嫁貴公は勝の奴とお猿と出でゝ
まもなくうれ出て簡を
ひらくとおもはれ　先ぞ出ました
中も人数もひつり松の庵は山めし　先ぞ出ました
島渡お嬢ん　まもなく下さいまして　下さいまして
嫁は胡平太　ゆゑ　うねて浪ふつまつて行孤ふ

寄合解集の人々　「コウなの武士も金ぞ」
冥の男ぞ　「ねえ人の代身ぞと先の野郎を死ぬ」
ねえ人　「十二ばかりまぶ真正の武士サ
今ひとつ抜て見る其　嫁金欲海のうるまでも
ひんまり誉さ　しばねえ人は手を打てうく
ねえ人　「嫁那延へ那狼が出
余程落ち　「遠へねえ　山男の武士より
ねえと　「遠の処ぞ
女の分が　年八十六　宮殿と

言ひ取りまハしとの隠かに那ゑう清人あるいとの
まろの ・〱お番人まる気でもきて頼きしどやて何へて
真平ごトヨ 〱おきやゝごとへ〱ト言ヒ那狼ゲ武士を
庶へ連て行うて分の振まるごらう なぜ気にあんぜ
■〱ナニ言沢八七編ゐ委〱沢とのふまるごらう知さ
らバ遠く倚て見る世人直ふ沢ゥこうり申セト 嘲
ゥらゥく西東おのゞまふく別をける
正史 実傳 いろは文庫 巻之十八了